

幼児期の美術館での鑑賞活動における心理的效果について ——「3H 美術教育」「創造的鑑賞」に依拠した美術作品鑑賞——

三椏 正典

A Study on Psychological Effect of Art Appreciation at Art Museum in Infants ——Based on the Fine Arts Appreciation of “3-H Art Education” “Creative Appreciation”——

Masanori MIMASU

Abstract

This article studied a psychological effect to happen when an infant worked on appreciation in an art museum. This study regards a theory of “3-H art education” and “creative appreciation” as a base. Two learning process models were set. First, the work appreciation of the art museum. Second, a sketching activity of a nude woman sculpture “Venus” which Aristide MAILLOL (1861-1944) made. Based on a post-activity evaluation, the activation of “Heart” draws “Head” and triggers “Hand”

Keywords: 3-H art education, creative appreciation

はじめに

今日の小学校における図画工作教育での「みる」（「鑑賞」の内容）対象は、低学年では自分たちの作品や身近な材料など、中学年では自分たちの作品や身近な美術作品や製作の過程など、高学年では自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、暮らしの中の作品などと児童の発達段階に応じて変わっている。幼稚園教育要領や保育所保育指針が改訂される中で、幼稚園教育を小学校での学習や生活へどのようにつなげていけばいいかという小学校教育との円滑な接続が今後の課題として取り上げられている。その中で、発達段階から「みる」対象に視点をおくと、幼児の「みる」対象は、小学校の低学年の自分たちの作品や身近な材料にどのようにスムーズにつなげていくかが、大切なポイントであると考えられる。

しかしながら、「みる」対象について発達段階という枠組みだけでその対象を限定するのは

いかなるものであろうか。「みる」という鑑賞活動は、「かく・つくる」という表現活動と同様に図画工作における子どもの自由な表現活動を支える重要な行為である。「みること（鑑賞すること）」について、西村（2005）は以下のように述べている。

鑑賞するということは、いったいどういうことなのか？その対象を考えると様々なものが浮かび上がってくる。美術や音楽、映画、舞台、それら芸術のみならず、街の風景やその雑踏、生活の中にあふれる音や臭い、ものの手触りや食の味わい等々、その対象は人の興味・関心に引き寄せられて際限なく広がっていく。鑑賞するということを考えた場合、まず浮かんでくることがある。それは「鑑賞」の文字が表すとおり、まさにその行為を通して、自らの鑑（かがみ）を得るということである。鑑賞することで、人はものを見分け聴き分け味わい、評価していく。

西村の論のように、本来、「みる（鑑賞）」の対象は、限定されることなく際限なく広がっていき、「みる」ことの実験をとおして、感覚の体験を蓄積し、自分の価値観・価値判断を作り上げ、表現活動へと展開させていくものである。したがって、「みる」対象を限定してしまうことは、子どもの自由な表現活動を限定させてしまうことにつながってしまう。一つの例が、「名画鑑賞」や「美術館鑑賞」である。小学校低学年での「みる（鑑賞）」対象では、学習指導要領に「身の回りの作品などを鑑賞する活動を通して」と明記され、鑑賞の対象として「名画鑑賞」や「美術館鑑賞」は、明記されていないためか、一般的な児童の発達段階からみると、鑑賞教材としてはふさわしくないと見られる傾向にある。はたして「名画鑑賞」や「美術館鑑賞」は、小学校低学年や幼児には鑑賞教材としてふさわしくないのだろうか。

確かに、幼児や児童の発達段階を考えたとき、低年齢の時期に自分や友達の作品や身の回りの材料などは、とても重要な「みる」教材ではあるが、美術館などに展示している「名画」「名品」もまた、自由な表現活動を支えていく重要な「みる」教材ではないかと考える。

そこで、本稿は、若元（2000）が提唱する「3H 美術教育」の基本理念である「感じる力（Heart）」を活性化させるなかで「考える力（Head）」と「みる・かく・つくる力（Hand）」に連動させ、自己教育力を培っていく美術教育と小澤（2006）が提唱する「創造的鑑賞」の基本理念である、作品を完成された一つのものとして鑑賞するだけでなく、創造の過程の中からも鑑賞し、そこから新しいものを造り出すという創造的な鑑賞活動を通し、幼児期の美術館での鑑賞活動における心理的効果を検証し、その有用性を示したものである。

1. 3H 美術教育

3H 美術教育とは、美術（図画工作）教育に関する若元の主張の中核をなすものである。幼児教育でも多く見られるようになってきた技術・技能中心の表現活動から、常に「感じる力（Heart）」の育成を最優先とし、ワクワクドキドキ喜びながら楽しみながら取り組んで行く中で、幼児や児童の最大限の Head を引き出し、活発な創造的な手の活動を誘発し、幼児、児童自らが自らを鍛えていき、主体性や創造的で豊かな人間性は育成されるのである。また「感じる力（Heart）」を基盤としてそれを活性化させることにより、「考える力（Head）」と「みる・かく・つくる力（Hand）」がこの文脈で展開される表現活動の中でこそ、「美術による教育」と「美術の教育」の双方が達成されると考えられている。若元が提唱する「3H」について、以下のように述べている。

「3H」とはなにか。これは、Heart, Head, Hand を示す。図1はこの三者の関係を図式化したものである。それにしても、いままぜ「3H 美術教育」か、その理由の第1は、この図式が教育における不易の課題とも言える「自己教育（学習）力育成」のそれと重なるからである。第2は、3H こそ、美術教育における「基礎・基本」と考えるからである。混乱に満ちた「基礎・基本」解釈への一石である。

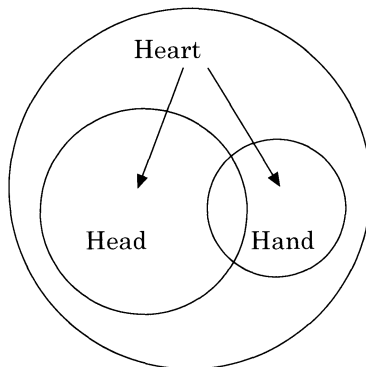


図1

3H 美術教育が求める「自己教育力」が、幼稚園教育要領の表現にある「豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊にさせていく」基礎・基本を培っていく重要なものではないかと考える。幼児の表現の中でも絵は、具体的な形や色を表出させていく上で鍵となるものである。岡田（1967）は、幼児が絵を描くことについて以下のように述べている。

幼児の絵とは、この子どもの内から湧いて止まない力が、創造活動を通して、色と形をもって定着し、一枚の作品となったものにほかなりません。そこで、殊に幼児の場合は絵を描く仕事が、心の問題として、人間形成につながる大事なことになって来ます。

描くという Hand の行為は、逆に Head や Heart を活性化させることにもつながると考えられる。そこで、鑑賞作品を完成された作品として見るだけではなく、作家の創造の過程の中から鑑賞し、そこから新しい発想などを創り出すという「創造的鑑賞」に依拠した鑑賞学習を手がかりとして、鑑賞活動「みたこと」を「かく」という活動を加えることによって、幼児の心理にどのように影響を与えるのかということ、美術館内（ひろしま美術館）で、実物の作品を鑑賞し、その作品を描く実践を試みた。

2. 創造的鑑賞

「創造的鑑賞」については、女学院大学論集第58集で、その基本理念については紹介したが、ひろしま美術館の作品事例をもとに、より具体的な方法論を紹介しておくこととする。「創造的鑑賞」は、埼玉大学教授の小澤基弘氏が提唱する鑑賞教育の方法論の一つで、作品をその表面から完成された一つのものとして鑑賞するだけでなく、創造の過程の中からも鑑賞し、そこから新しいものを造り出すという創造的な鑑賞のあり方を示したものである。(図2)

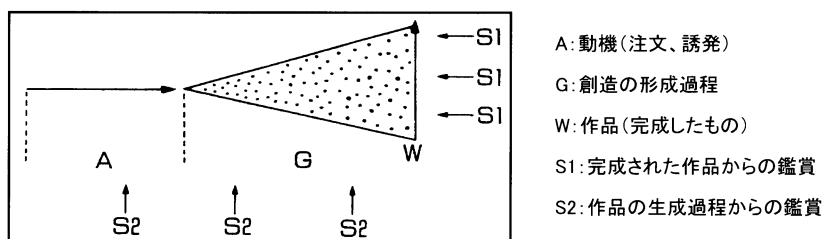


図2 創造的鑑賞の図式

図3のマティスの「ラ・フランス」の作品展示は、1945年に開催されたマギー画廊での展示をそのまま再現したものであるが、マティスは、当時この展示を「教育的展覧会」と呼び、自らの作品の創造過程をあたかも教えるように鑑賞者に提示したのである。この展示は、創作過程に視点を向けている点から考えると小澤の提唱する「創造的鑑賞」の鑑賞方法の一つではないかと思える。その完成作品だけでなく、創造の過程の中からも作家をとらえていこうとする「創造的鑑賞」の鑑賞方法は、作品の表面的な印象だけでなく、作家（マティス）の心理的な創造プロセスそのものもつくり知れない可能性を見出すことができる重要な意味を持って

いると考えられる。写真だけでなく、作家や作家に関わる人が残した文章や資料などからも作家の創造過程をたどることもできる。例えば、ゴッホの「ドービニーの庭」などは、実際にゴッホがその絵を描いているときに、弟のテオ宛ての手紙などの文章『はくはドービニーの家と庭をより力のはいった絵にしようと思っている（テオ宛て書簡642より）』や書簡に描かれたスケッチを見ると、ゴッホが、彼の最晩年にこの「ドービニーの庭」の制作に対して今まで以上の思いを込め、全精力をかけて取り組もうとしていたことが伺える。このような残された制作に関する資料（図4）から作者の心理を通して作品を見ることも「創造的鑑賞」の鑑賞方法と言えるのではなかろうか。これらのような創造過程にも着目させる鑑賞活動は、見るという鑑賞者の視点だけでなく、マティスやゴッホという制作者の視点からも創造過程に関して、見て、感じ、考えることができ、作者の Heart（心）や Head（構想）、Hand（手）をイメージできる鑑賞活動につながるのではないかと思える。このような創造過程に着目した鑑賞活動は、「自分の創造過程をふり返り、自分らしい感性（Heart）を働かせて、創意工夫（Head）しながら、自分流をつくる（Hand）」力の育成に有効に作用し、3つの美術力（「感じる力（Heart）」「考える力（Head）」「みる・かく・つくる力（Hand）」）の育成の手だてにつながるのではないかと思える。



図3 マティス「ラ・フランス」展示風景

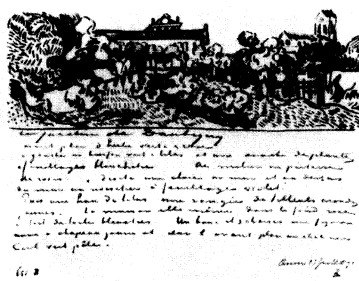


図4 ゴッホ「テオ宛の書簡651」とスケッチ

3. 「3H 美術教育」「創造的鑑賞」に依拠した美術作品鑑賞

1) 「3H 美術教育」「創造的鑑賞」の学習過程モデル

昨年ひろしま美術館で実践した「創造的鑑賞」の学習過程モデルを基盤に「3H 美術教育」の理念を加えた学習過程のモデルを以下のように設定した。

学習活動	具体的内容
鑑賞①（初発的鑑賞）	「みる」「感じる」(Heart) 美術作品に対して受動的に関わる状況の鑑賞
↓	
創造・表現活動 （自己表現）	「かく」(Hand) 美術作品に対して色や好きな形など感じたり、思った りしたことを鉛筆を使って自由に描く
↓ ↑	
鑑賞②（創造的鑑賞）	「みる」「感じる」「考える」(Head Heart) 美術作品に対して自分が描く（創造する）視点で主体的 に関わる状況の鑑賞

図5 「3H 美術教育」「創造的鑑賞」の学習過程のモデル

2) 学習内容

- ① ひろしま美術館の常設展示の平面の作品を担当の先生と一緒に鑑賞する。
「みる」「感じる」
- ② 展示作品の中で最も大きい1点の立体作品（マイヨール作・ビーナス）を色々な角度から見る。「みる」「感じる」「考える」
- ③ 自分の好きな角度を見つけ、色鉛筆（白）を使ってパネルに描く。
自分の描きたい角度が見つからない場合は、自由に移動する。



- ④ パネルに描いた作品をみんなで鑑賞する。

3) 授業実施場所・日時・対象園及び学年の園児

実施場所 ひろしま美術館 常設展示室 中央ホール

日 時 2009年6月9日(火) 11:00~11:30

対 象 園 聖モニカ幼稚園 年長園児 51名

4) 学習のねらい

本学習では、以下のようなねらいを設定し、実践した。

1. 美術館の実物の作品に興味・関心をもたせ、鑑賞活動を楽しみ・親しむことができるようにする。
2. 美術館の実物作品の色や形の美しさなどに気づくことができるようにする。
3. ひろしま美術館の立体作品(マイヨール作「ビーナス」)を色々な角度から見て気づいたことがらを自分なりに表現して楽しむことができるようにする。
4. 鑑賞活動を通して、作品の良さや美しさを共に深めることができるようにする。

4. 事例の考察

1) 鑑賞作品

昨年度は、ひろしま美術館の常設展の作品(78点)を鑑賞し、その後、「みた」平面作品の中で自分が印象に残ったり、好きな色や形を思い出させ、隣接する美術館内の空間で自由に描く学習過程を行った。美術館という公共空間内での描画活動ということで、使用する描画材料などいくつかの制約はあるものの、各自が感じた色や形を楽しく表現することができた。しかしながら、表現する過程で、花はチューリップの形、雲はモクモクとした形、家は△屋根に□の窓などあたかも共通記号のように同じ形式で描こうとしている様子が見られ、はたして本物の作品を見たことがその後の表現活動で個々の創造性として十分発揮されている創造的鑑賞になっているのかどうか、疑問が残った。そこで本実践では、昨年度の課題を踏まえ、最初は昨年同様に常設展の作品を自由に鑑賞した後に共通の作品に対して「それぞれがどのように感じるのか」、「どのように自分なりに表現していくのか」を見るために、描いていく鑑賞作品を共通の1点に設定した。

鑑賞作品として選んだのは、図6のマイヨール作、ビーナスである。平面作品と比べて立体作品は、360°から作品を「みる」ことができ、そこからそれぞれが違った形を見つけることができるため、立体作品を選んだ。また、この作品の展示は、図6にもあるように大きな円形の空間に設置されていて、鑑賞しながら描画活動ができる好条件でもあることも、選定理由の大きな要因となった。



【作品】

作 者：マイヨール (Aristide MAILLOL 1861-1944)

作品名：ヴィーナス (Venus 1918-28)

素材・サイズ：ブロンズ (174.0×55.0×40.0 cm)

図 6

2) 描画材料 (パネル・画材)

・パネル

昨年の表現活動 (描画活動) では、共同制作のように、1枚の大きなパネル (103 cm × 73 cm) に何人かが集まって描き進めて行く形式をとった。描く過程で、「自分だけで描く紙が欲しい」「みんなと一緒だと描けない」「自分の描く場所がない」などと、実際に描いていく難しさを教師側に投げかけてくる園児が何人か見られた。そこで、今回の実践では、個別のパネルを用意し、最初の段階で自分の描く対象に集中できるように設定した。パネルは厚さ (2 cm)

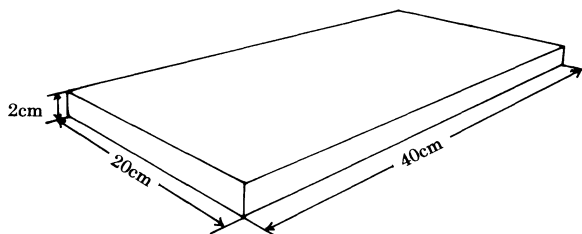
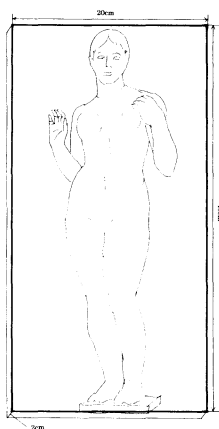


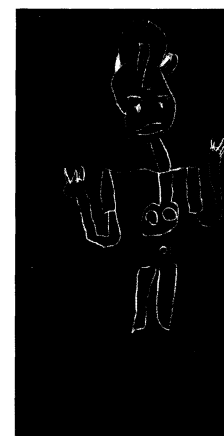
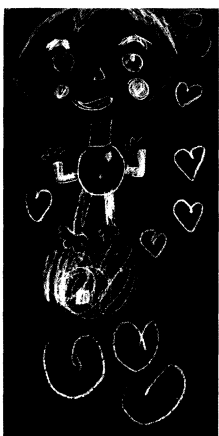
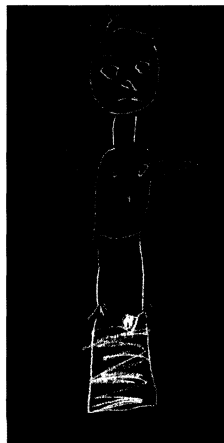
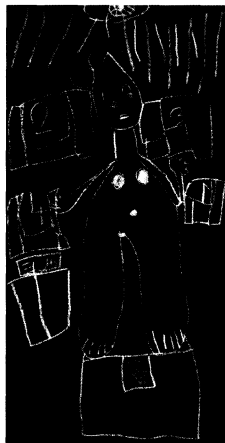
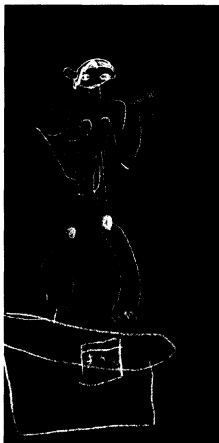
図 7 パネル (サイズ)

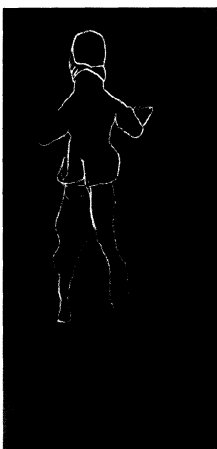
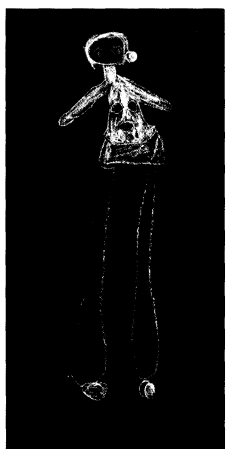
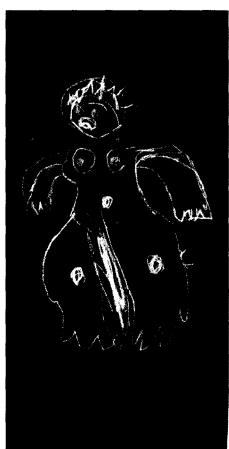
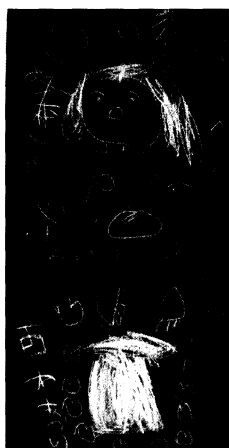
があり、ベニヤ板に紙を貼っているのので、幼児でも自由に描くことができるため、今回もパネルに描かせた。サイズは、図7のように作品のサイズが画面一杯に入る比率を測り、特別注文でパネル（20 cm × 40 cm）を作成した。

・画材

描画材は、美術館内での筆記用具規程で鉛筆もしくは色鉛筆ということで昨年度はサクラクレパスのクーピーペンシルを使用した。クーピーペンシルは幼児にとって少々硬質だったためか、描画の途中でペンシルを折ってしまう園児が何人か見られた。そこで、今回は紙巻き三菱水溶性色鉛筆（rainbow）を使用した。鑑賞作品がブロンズで、色が黒っぽいいため、下地を黒画用紙にして、色を1色（白）に限定して描かせた。

黒画用紙に関しては、鑑賞作品がブロンズで黒っぽいために、人体像の黒色を描画で塗って





表すのではなく、輪郭線を描いた段階で容易に人物像の黒色を表しやすくするために、黒画用紙を用いた。また白色の色鉛筆で描かせたのは、明暗を感じさせながら描かせたいことと、通常は、白で描くという機会がほとんどないために、はっきりと白い線が浮き出るといふ、描画そのものに興味をもたせるために白色鉛筆を使用した。

前図は、園児たちがマイヨールのビーナスを見て描いた作品である。

3) 画面構成と頭の比率について

図7のように、初めて立体の人物像を描く幼児にとって、スムーズに描き始めるようにパネル形式と用紙サイズを設定した。しかし、実際に人物像を描き始める前には、園児には画面構成（レイアウト）や人体の頭部・胴体・手・足などの長さやフォルムの比率などにはほとんど触れず、「見て感じたこと気づいたことを思い切って描きなさい」「どう描いていいのか分からない人は、顔から描き始めるといいよ」とだけ指示して描かせた。図8は、全園児が描いた作品の人体の頭の部分の大きさをまとめたものである。実際に正確に頭部の長さを捉えてパネルに描いた場合の頭部の長さは約5cmであるが、多くの園児は、初めて立体の人物を描いたにもかかわらず、正確な大きさを捉えている。（頭部の大きさの園児が描いた平均は5.42cm）また画面の構成においても、ほぼ中心に近い部分に頭部を描き、バランスの取れた構成に描いている。

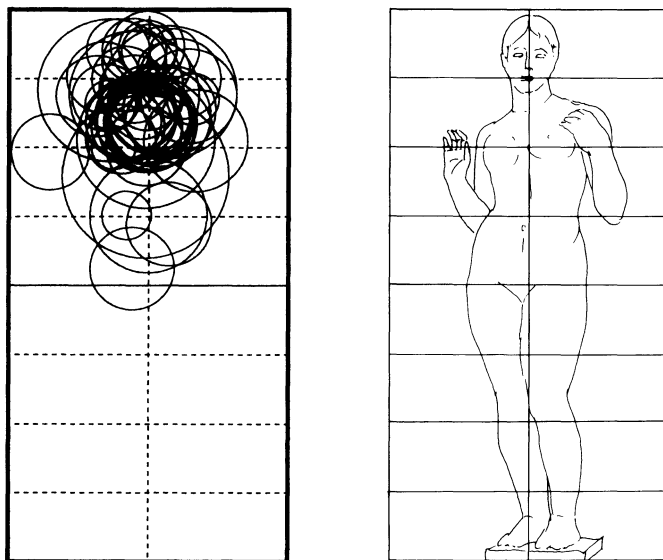


図8

4) 園児の様子と変化

園児がそれぞれ美術作品を見ている様子、パネルに描いている様子、また、その後園に戻って色々な活動の中や、家に帰っての様子などから今回の活動後変化の様子などを各担任の先生に書いていただいた(①~③)。事前指導として、幼稚園で美術館鑑賞や作品を見て描くという活動についてお話をしていただいたが、「美術館には行ったことがない」「実際に作品だけでなく、物を見て描くという経験がない」という園児がほとんどであったが、幼稚園では事前にひろしま美術館収蔵作品図録をもとに、絵を見ながらお話をする時間を担任の先生と過ごしていて、事前に展示している絵については、何点かすでに知っている園児が多かった。

①常設展示作品を見ている様子

- ・羊の群れが還ってくる絵画を見て、「迷子のメーコちゃん、この中におるんかね?」と以前幼稚園で話した物語のお話を思い出し、連想したり、少年と少女を見て「何話とるんかね?」「おかえりーっていつとるんじゃないん?」とまるで絵から子どもたちの耳に会話が届いているようでした。
- ・ピカソの作品の前では「何かこわ〜い」「かおがバラバラ〜!」「水がいっぱいちっとるみたい」「目がひとつ!」「タケコプターがついとるみたい」などと一番反応があり、とても印象的だったようです。

②マイヨールのビーナス像をみて描いている様子

- ・初めてで期待を抱いている子どもと、戸惑う子どもを様々でしたが、描き出すきっかけをつかむと、描けなかった子どもも、ビーナス像をじっくり見て描き始めていた。
- ・「先生、どこを描いてもいいんよね?」と様々な角度から描いてもいいということで「おしり描きたい」と数名ほど、後姿を描く子どももいましたが、ほとんどの子どもたちが顔が見える角度から描いていました。

③その後園に戻って色々な活動や家に帰っての様子などから今回の活動後変化の様子

- ・園に帰ってから「先生〜、絵が描きたい!」とクレパスを手にして、一人の男の子が私のもとへやってきました。四つ切りの白い画用紙を渡すと“ビーナス像”をはじめ、常設展で見た“羊”の絵画を思い出しながら描いていました。普段は率先して絵を描く子どもではなかったので、驚きましたが、描きたくなるくらい心に響いた1日だったのだと思いました。
- ・美術館では十分描けなかった子どもの中には、家に帰ってから全体像を思い出し、細か

く丁寧に描いていた子どももいました。

- ・家に帰ってから、お母さんに人物像の話をした子どもがいて、手のポーズを具体的に話をしたところ、その姿からお母さんは「赤ちゃんを抱っこしているんかね？」と伝えると「違うよ、おいでおいでしてるんよ」と自分がしっかり感じたことを伝えたようです。
- ・ある子どもは、家でも2歳の妹に「動いちゃいけんよ！」と静止をしてもらって、妹の絵を描いたり、ポケモンなどの小さなフィギアの色々な角度から描いたりして過ごしている様子でした。

5. ま と め

美術館での鑑賞活動が幼児期の子どもに対してどのような心理的効果をもたらすかということをも明らかにするために、若元の「3H 美術教育」と小澤の「創造的鑑賞」の基本理念のもと、美術館での美術作品の鑑賞活動から表現活動へと向かわさせる授業実践研究を行った。実際に園児が美術館で描いているときの様子やその後の幼稚園や家に帰った後の様子や、その時描いた「作品」をもとに考察すると、今回の幼児期の子どもたちが実践した美術館での鑑賞授業は、様々な心理的効果をもたらすことができたのではないかと考えられる。その主な心理的効果として以下の3点挙げられる。

1. 「本物の作品を見て描くということ」で、心がワクワクドキドキと活性化することにつながり、「かくこと (Hand)」の意欲を高めることができた

第1に「美術館で本物の作品を見て描くということ」を体感したということである。これについての成果は、昨年度の実践のまとめでも述べたが、実物の作品鑑賞は、その色や形などに直接触れるだけでなく、大きさや量感を直接感じることができるのである。また、花や静物、風景などを見て描くことと異なり、作品を見て描くことは、実際に作家の制作活動の行為をたどる活動であるために、「自分も作者と同じように作る」という共有感を無意識に作り出ることができる。特に今回は、等身大の一つの立体の作品を色々な角度から鑑賞し、描かせたが、「日頃絵を描くなどの活動ではほとんど描こうとしていない子どもが、今回はとても興味をもって一生懸命描いていた」や「家に帰って、ポケモンなどの小さなフィギアを色々な角度から描いて過ごしている」など、美術館での創造的な鑑賞活動によって生じた心の活性化が、「みること」「かくこと」の子どもたちの活動に大きな変化をもたらしたのではないかと思える。

2. 「人物像 (裸婦像) の全体像を描くこと」によってバランス感覚や構成感覚を導き出すことができた。
3. 「立体像を描くということ」によって、園児一人ひとりがもつ、多様な個性を表出させ

ることができた。

今回の美術館での実践も、昨年度と同様に「みること」から「かくこと」と意識的に鑑賞に対しての姿勢を変化させて行ったが、昨年度と大きく異なったのが、「みること」の作品を1点に設定し、見る角度を360°に広げたこと、昨年度は大きなパネルにみんなで「みたこと」「感じたこと」を自由に描かせたが、今回は各自にパネル1枚ずつ配布し、自分の好きな角度をみつけさせ、描く場所を自由に移動させたことであった。最初、立体の裸婦像を描くように指示したときは、実物を見て描くということを経験していない園児がほとんどだったためか、「え～!? 描けない」「わからない!」の声がたくさん出てきた。しかし、「思い切ってチャレンジしてみよう!」と「どうやって描いたらいいのかわからない人は、頭から描いてみよう!」という2点を伝えると、あっという間にみんなが、一斉に集中して描き始めた。この変化は、驚きであった。描く時間は、約20分程度ではあったが、考察に見られたようにほとんどの園児が、人物像のバランスをしっかりと捉えて描くことが出来ていた。パネルのサイズの効果も考えられるが、様々な角度から作品を鑑賞し、全体像を描くことで、園児が本来持っているバランス感覚や構成感覚を導き出すことが出来たのではないかと思える。授業実践に関わっていただいたひろしま美術館学芸員の古谷可由氏は、園児の描画に関する今回の様子について以下のように述べていた。

園児（4～5歳）がマイヨールの立体作品（ビーナス）を描いている様子は、20世紀半ばにおこったアンフォルメル形式によく似ている。その形式とは、対象物の形状をしっかりと把握した段階で、自由に形を変形させていく手法であるが、そういったアンフォルメル手法と幼児の手法が重なるのがとても不思議で面白く感じた。

また、おそらく大人の場合は、特徴的なものを捉え、描こうとすることに対して園児は対象の作品に対して、「見える」あるいは「見たもの」を素直に形にしてる様子であった。描かれた作品を見ても分かるように、多くの園児の見方は対象物を○△□と基本的な抽象形態で捉えており、セザンヌの物の見方と重なる場所も面白く感じた。

実際の園児の個々の作品を見ても分かるように、「見えるもの」「見たもの」を素直に描いていることによって、個々の手によって描き出された人物像は、一人ひとりの個性を象徴しているかのように様々な人物像として描き出されていた。また、その描く様子は、古谷氏も述べているように、過去の美術家たちが辿ってきた表現形式と重なる不思議な類似性も見つけることができた。この類似性については、幼児期より、人間本来が無意識に持ち合わせている表現に対する本能的な捉え方ではないのかと考えられる。その類似性については、今後引き続き研究していきたい。

引用・参考文献

- 文部科学省 『小学校学習指導要領』 2008. pp. 71-75
- 文部科学省 『幼稚園学習指導要領』 2008. pp. 8-9
- 厚生労働省 『保育所保育指針』 建帛社. 2008. pp. 16-17
- 西村德行 『図画工作 みかたがわかる授業づくり』 東洋館出版社. 2005. pp. 11-13
- 若元澄男編集 『図画工作・美術科重要単語300の基礎知識』. 明治図書. 2000. p. 21
- 若元澄男 「よい美術教育を創る7つの指針」. 『学校教育実践研究第11巻』. 広島大学大学院教育学研究科
附属教育実践総合センター. 2005. pp. 163-172
- 岡田 清 『幼児の絵の見方』 創元社. 1967. p. 4
- 小澤基弘 『絵画の制作 自己発見の旅』. 花伝社. 2001. pp. 109-122
- 小澤基弘 『絵画の思索 絵画はいつ完成するか』. 花伝社. 2006. pp. 156-160
- J・A・シュモル編 中村二柄他訳 『芸術における未完成』 岩崎美術社. 1971. pp. 11-13
- 天野知香 「マグー画廊におけるマティス展覧会1945年12月7日-12月29日」. 『マティス展』. 読売新聞東京
本社. 2004. pp. 128-133
- 収藏品図録-西洋編 『ひろしま美術館』 1994. pp. 208-209
- 古谷可由 「幼児の絵画表現とアンフォルメル形式について」 2009. インタビューより